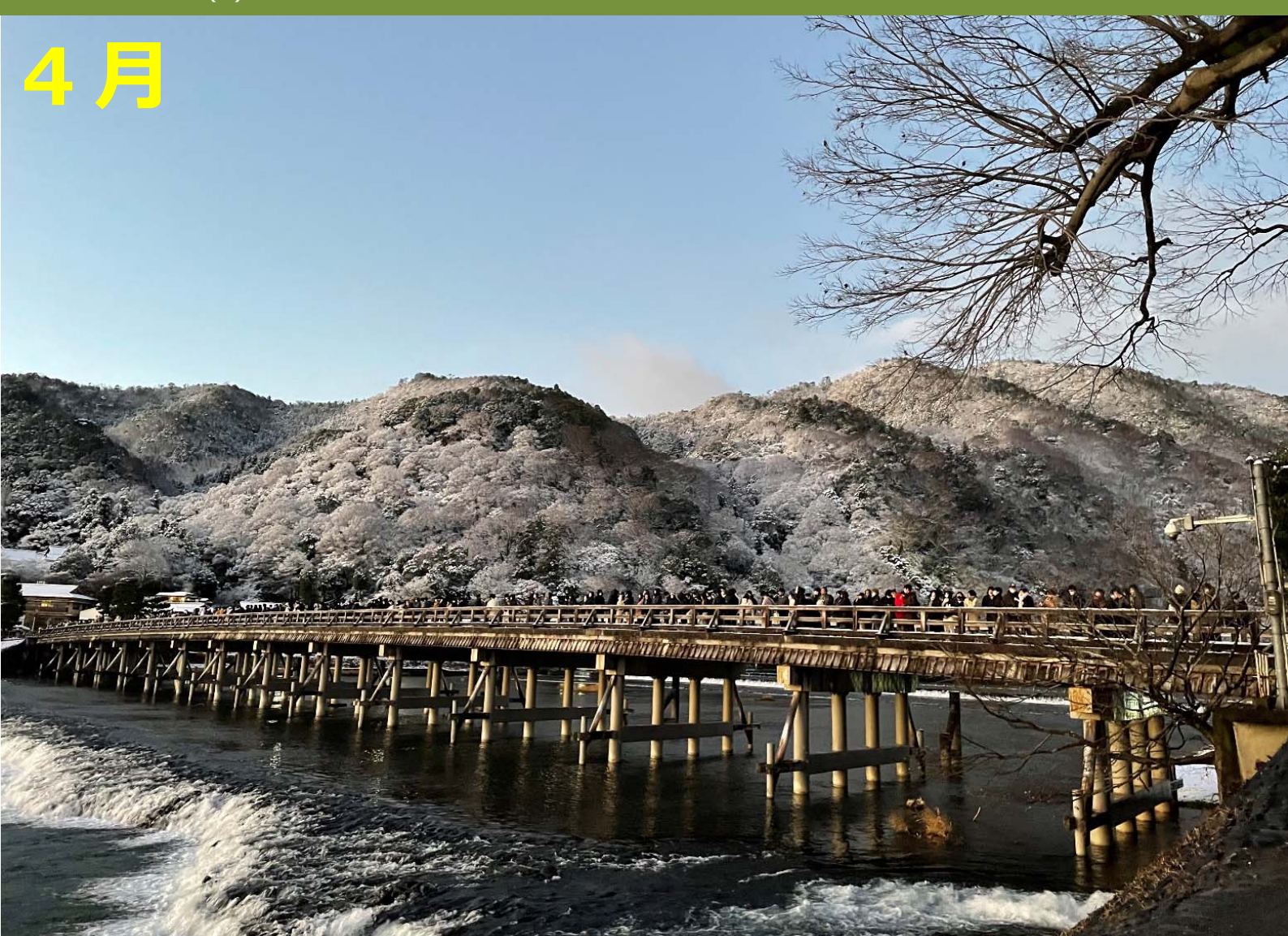


4月



あの日のあの川 リレー日記 ～第61話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第61話主人公 安藤ひなた

(筑波大学 社会国際学群 国際総合学類 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：京都府大堰川(桂川))

「災害と人」

いつのこと？： 中学二年生、大学二年生

どこの川？： 京都府京都市、宮城県名取市

こんにちは。三森さんよりバトンを受け取りました、筑波大学白川研究室の安藤ひなたです。私の地元である京都市には左京区に鴨川、右京区に大堰川(私たち地元住民は桂川と呼んでいます)が流れています。私はカップルが等間隔で並んだり小説の舞台にもなっている鴨川でなく、BBQができたり野犬が走り回っている(危ない!)大堰川の近くで育ちました。

今回はこの大堰川が氾濫した際のお話と、大学に入ってから東北の被災地を訪れた際のお話を書かせていただきます。

上では BBQ だの野犬だのと書きましたが大堰川は保津川下りが体験できたり、渡月橋が掛かる嵐山や松尾大社といった観光地を經由している川です。昔はこの川を通して多くの木材やものが都に送られてきました。まさに私の地元だけでなく京の都を支えていた川になります。

こんな大堰川は川幅が広く、のんびりとした風景が魅力の川でした。しかし私が中学2年生の10月、台風18号の影響により渡月橋の辺りで大堰川は氾濫してしまいました。テレビで報道された映像に大きな衝撃を受けたことを今でも覚えています。また、嵐山の商店街や川辺にお店を構えていた同級生の店舗や家が浸水し、翌日学校で話題になりました。周りに海がなく、水への恐怖心があまりなかった私にとって、身近な川が実は災害をもたらすものであったと初めて実感する出来事になりました。私が通っていた中学校は毎年大堰川清掃といって夏に川の清掃を行っていたのですが、翌年の清掃はこの氾濫によって川底まで全て一掃されたため、清掃する場所がないと判断され中止になりました。

大堰川はこの氾濫後、川底を深くする工事が行われました。2018年7月に再度京都市は記録的な大雨に見舞われ、大堰川も河川敷の高さまで増水しましたが氾濫することはありませんでした。災害が起こった後、しっかりと次に備えていたからこそ防げた事例になりました。「死者がいなかったから、浸水被害で済んだから、良かったね」で済ませなかったからこそ守れたものが沢山あった2018年7月だったなと今振り返っても痛感しています。

大学生になった私は東日本大震災の被災地を訪れようと、宮城県名取市の閑上地区を訪れました。閑上地区は太平洋に面した地区であり、また名取川が太平洋に流れ込む地区です。名取市震災復興伝承館では川を逆流して津波が市街地を飲み込んでいく映像を見ることができました。川が津波の通り道になる、川が氾濫以外で人々に被害をもたらす様子に言葉を失うとともに、このような被害にあったにもかかわらず震災後に再度人が閑上地区に戻ってきている様子に衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えています。災害に遭ってもなお、川や海、水と共生していく人々の姿を見たことは、「災害の少ない土地に住めばいい」と安直に考えていた私の価値観を一変させるものでした。そんな私が受けた衝撃とは対照的に、閑上の海や名取川はとても穏やかでした。「きっと私にとっての大堰川と同様に、閑上の人々にとって名取川や海は大切な故郷の風景なんだ」と、稚拙な感想を持つたりもしました。

短くて急な川が多く、地震や津波の危険性が高い日本でこれからも水が関わる風景を大切にしながら、一方で川は災害を起こす自然の一つであることを心に留めながら生活していきたいなと思います。地元を振り返った時に自然と調和した風景を思い出せることに幸せを感じながら生きていきたいです。思っていたよりも稚拙な文章かつ最後はなんだかまとまらなくなりましたが、こんなところで締めさせていただきます。

ちなみに冒頭の写真は今年の初日の出を渡月橋のふもとから見た時の写真です。日の出のタイミングで吹雪にあったため、雪化粧をしています。大学卒業後はまた別の場所で生活することになるかもしれませんが、初日の出はこれからもここで見たいなと思っています。

最後までお読みいただきありがとうございました。

(次は井櫻吉乃さんにバトンを託します)